

金沢大学角間キャンパス第二総合移転予定地の調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7578

金沢大学角間キャンパス第二期総合移 転予定地の調査

岩田安之

金沢大学総合移転事業第二期計画が進行中である。総合移転の予定地に遺跡があるかどうかを確認するため、金沢大学考古学研究室が中心になって1995年3月に試掘調査を実施した。本報告は現在、研究室で作成中であり、その途中経過をここで報告する。

遺跡が発見された地域は、浅野川から少し入った山間部の入口にあたる。段になる2つの平坦面があり、上段の平坦面Aは東西約80m、南北約70m、下段の平坦面Bは東西約60m、南北約40mである。地元古老からの聞き取りでは、この地点はイッチョウジ(一丁寺?)と呼ばれており、平坦面では畑作をしたことがないという。

遺跡の確認調査は1995年3月15日から29日までの9日間行った。トレンチを計13本、山際のラインに直交する形で、平坦面と山際にかかるように設定した。幅1m、長さは3mから15mである。平坦面が人工的に造られたものであるなら、尾根を切断して造成するか、谷側に盛り出して造ったと推定されたため、平坦面の端をつかむことで効率的に人工であるか否かを把握するよう努めた。その結果、トレンチ1、2を設定した平坦面に斜面の削平によ

る人為的平坦面の造成が確認できた。他の平坦面は地滑り層や自然堆積層であり、造成の痕跡は確認できなかった。遺物の出土したすべてのトレンチにおける遺物包含層は基本的には黒褐色土層である。しかし造成の確認されたトレンチ1、2のある平坦面からの遺物の出土はなかった。

出土遺物は計154点である。土師器が152点を占めるが、その他は須恵器蓋1点、鉄滓1点、大正時代の貨幣1枚である。土師器の器種は碗がほとんどであり、それ以外には小皿、杯と思われるものがある。碗の立ち上がりは直線的なものが多く、大きさは口径約9cmの小型のものから18cm程度の大型のものもあり多様である。土師器には、内面黒色処理をされたものとされないものがあり、内面黒色のものは概して器壁が薄く、立ち上がりの強いもの、そして高台をもつものに顕著である。高台をもたないもので内面黒色のものは1点のみである。さらに内面黒色のものは他のものに比べ胎土もきめ細かいことから、いわゆる精製品と考えられる。壺、甕などの貯蔵用具や鍋、釜などの煮沸用具がほとんど出土していないことも注目される。

遺物の観察から、遺跡の年代は10世紀前半から12世紀中頃、すなわち平安時代の中・後期であると推定できる。

遺跡の特徴は、平野から谷沿いに少し山間地に入った山の斜面に立地している点にある。また、山腹に狭小な平坦面を造成したもので、大きな居住面積はない。このような点から考えて、ここに通常の集落があったとは考えがたい。同様の遺跡は金沢市内をはじめ、北陸の各地で近年発見されている。今回の調査では宗教関係であることを明確に示す遺構・遺物は発見されていないが、古代の山岳宗教関連の遺跡である可能性は十分に考えられる。